ア地域にはフェイバナナ *Musa fehi* があり，別の栽培品種ができている．これは普通のバナナとは別の節 Sect. Australimusa に属し，染色体の基本数10，果房は直立する（普通のバナナ Sect. Eumusa は基本数11，果房は垂れる）．

日本には小笠原と沖縄にシマバナナがあり，果実は小形で黄熟，皮が薄い．バショウは本州北部まで栽培され，バナナ属中最も耐寒性が強い．沖縄にはイトバショウがあり，茎（葉柄の部分）から繊維を取って芭蕉布が作られる．フィリピンのアバカも同様繊維が取れるが，この方は強靭で耐湿性の強いマニラアサで，ロープ・漁網・衣類・紙などの原料になる．その他バナナ属の種類には解熱など薬用になるもの，鑑賞用として植えられるものなどがあるが，何と言っても食物としてのバナナ産業は大いに有望で，21世紀の食料問題はバナナなしには解決できないだろうと結んでいる．

（伊藤　洋）

緑区・自然を守る会：**カタクリの咲く谷戸に**（横浜・新治の自然誌）80pp. 1991. 文一総合出版，〒162　東京都新宿区西五軒町 13－10，￥2,000（税込）．

横浜市西北部の緑区は，北の川崎市と西の町田市に接している．一方南は多摩丘陵の末端に近く，至る所に谷戸（やと）と呼ばれる小さい谷があり，豊富な湧き水によって緑あふれる雑木林や水田ができているので，植物の種類が多く，昆虫や鳥もたくさん住んでいる．ところがここにも開発の手が延び，自然が破壊されて緑が減ってきた．それを案じて10年ほど前に当区新治町に発足した「自然を守る会」の方々が，観察会を行ない写真を撮り生物を調査して記録した結果をまとめたのがこの本だという．A 3 判を短かくした形の横開きで，2 頁にわたる大型から小型のまで大小合計100余の写真は何れも色美しく生々と自然を捉えていて，どこを開いても楽しい．写真の約 6 割は植物の生態や大写し，残りが鳥や昆虫，そして興味深い解説が付いている．配列は春夏秋冬の順で，3 月第 1 週「ニワトコの週」から始まって第 2 週「カントウタンポポの週」次いでイノデ・カタクリ・アケビ…と続き，翌年 2 月第 4 週「ウグイスの週」で終っている．植物の見出し21，昆虫14，鳥 8，その他5となっている．巻末に15頁の資料編がある．「新治，路傍の花暦1990」は230種の植物の10日毎の花の咲き工合を 3 段階で表示した記録の表で，「新治・三保の植物雑記」は雑木林・シダ・春植物・ハンノキ林・失われゆく草原の植物・固有種・山地性種の遺存についての説明，次に蝶・トンボ・野鳥に関する記事があり，最後にこの 9 年間に緑区の自然環境が開発によってどれだけ失われたか，いつか・どこかで・たれかが何とかしなければ，と結んでいる．

（伊藤　洋）

阪井與志雄：**マリモの科学**　202pp. 1991. 北海道大学図書刊行会，札幌．￥1,854.

マリモは，名まえは人々に広く知られているが，どのような生物ですか？生態は？生殖方法は？などと訊ねられてすぐさま答えられる人は多くない．湖底に生育する，分布域が限られる，特別天然記念物であることなどもあって，調査研究のグループや研究者が限られる傾向にあり，成果の報告も学会誌や専門誌などよりむしろ文化財保護関係や自治体の刊行物などに多く，従ってマリモについて知見を総合的に蒐集するには相当の努力が必要である．著者の阪井興志雄氏は元北海道大学海藻研究施設長で，マリモが分類上所属する緑藻シオグサ属（*Cladophora*）の分類を専門とし，北大理学部の助手時代より山田幸男教授に協力してマリモの調査研究に携わり，爾来マリモについて知見を深め，その保護にも深心を持ってこられた方である．マリモについて現在どこまで知り得たか，研究者はこれから何を解き明かそうとしているかをまとめたものが本書であるという．13章から成り，マリモ発見の歴史，分布，集団の構造，藻体の構造，生殖及び生長の様式，球化，生理及び分類等を扱い，最後の章で阿寒湖のマリモ被害と保護対策を述べている．引用文献は88に及ぶ．芝生のように拡がっているものが多いこと，栄養繁殖のほかに 2 本の鞭毛をもつ遊走細胞をつくること，水深 1 m，波長 3 m，波高30㎝ のとき直径 5 の球体は6.2㎝の幅で動き，1 時間に2,980回転することなど，新しい知見に遭遇する読者も多いと思う．人工球化についての紹介もある．残念なこと

に，著者は完成前に急逝され，本書は小樽商科大学の山田家正博士が遺稿を整理されることにより刊行を見た． (千原光雄)

水野寿彦・高橋永冶(編)：**日本淡水動物プランクトン検索図説** 532pp. 1991. 東海大学出版会. ¥15,450.

日本の淡水藻は，1977年に「日本淡水藻図鑑」(内田老鶴圃) が出て同定がしやすくなったが，鞭毛をもって泳ぐ藻類については，一部を除いて掲載種数が少く，この点は物足らないものであった．本書は動物プランクトンの名称をもつが，後半の約120頁を「植物性鞭毛虫綱」として鞭毛をもつ藻類を扱っている．各藻群の種類数と執筆者は，クリプト藻類9(原慶明・恵良田眞由美)，渦鞭毛藻類56(安達六郎)，ミドリムシ藻類125(加藤季夫)，黄金色藻類106(高橋永冶)，ラフィド藻類5(庵谷晃)，ハプト藻類2(高橋永冶)，緑藻ボルボクス類58(野崎久義)，プラシノ藻類2(野崎久義)である．それぞれには図を中心とした種の検索が添えられる．淡水プランクトンの同定には先の「日本淡水藻図鑑」と本書の併用が不可欠となろう． (千原光雄)

馮 宋明(責任編集)：**拉汉英种子植物名称** vi+1036pp. 1989. 科学出版社. 29.20元. 郑 儒永他編：**孢子植物名詞及名称** iv+962pp. 1990. 科学出版社. 35.50元.

中国の植物について，種子植物は学名，漢名，英名の対照表であり，胞子植物については学名と漢名の対照表である．種子植物の英名は，学名をそのまま英語読みにしたものが多く，たとえばトベラの英名をTobira Pittosporumとするなど，英語国で通用するのかどうかと首を傾げるものもある．その点，胞子植物の方は，実際使われている英名だけが挙げられており，俗名索引で検索できるようになっている．一方，種子植物の方は漢名の索引があるのに，胞子植物にそれがないのは一寸不便である．胞子植物の方は英語の学術用語の標準漢訳も与えられている．学名と漢名がこのように包括的に対比され，便利な書である．

(岩槻邦男)

内村悦三：**熱帯林のすがた** (のぎへんのほん 50) 1991. 研成社. ¥1,300.

環境問題がマスコミにも広く取り上げられるようになってきた．熱帯林の伐開の問題も例外ではない．1992年の国際環境会議の主要なテーマの1つになるらしい，という雰囲気が，一層熱帯林とそこにみられる生物の多様性に人々の関心を惹きつける．しかし，残念ながら，今世間に流される熱帯林の話題は多少軽薄な見聞談にもとづいたものである．最近，熱帯林について，秀れた書物も刊行されているが，研究者の書いたものには，植物学的には秀れていても，一般の人々に取っつき難いものが多い．

「のぎへんのほん」シリーズは科学の現代的問題を一般の人々にも分かりやすく平易に紹介するために編集されているものであるが，50冊目となった本書は，著者の長年の熱帯林の調査研究の成果がやさしい文章で綴られた好著である．熱帯林を見たことのある人にもない人にも，熱帯林について考えてみるよいきっかけを与えてくれるものである．

残念なことに，初版には幾つかのミスプリントなどが残っているが，広大な熱帯林の諸問題を1冊の本にまとめる難かしい仕事のことを考えればさしたる難点ともいえない． (岩槻邦男)